# 第13章　「卑弥氏」の渡来（第１回目）（佃説）

## １　「倭城」からの逃亡（第１回目）

### (1) 秦時代の天氏と卑弥氏

「前221年」に始皇帝は「秦王朝」を樹立する。

■「天氏」は「大凌河下流域」に居る。

■「卑弥氏」は「大凌河上流」の「倭城」に居る。

### (2) 秦による苦役と逃亡者

「秦王朝」は「万里の長城」や「幹線道路」の建設に人民を酷使する。
秦の苦役を避けて逃亡者が続出する。

辰韓在馬韓之東。其耆老伝世、自言、古之亡人避秦役、来適韓国。
『三国志』辰韓伝

（訳）辰韓は馬韓の東にある。其の耆老（きろう＝老人）は世々伝えて自ら言う、古の亡人が秦の役を避けて来り、韓国に適（ゆ）く。

「辰韓」は「秦の苦役を避けて韓国に逃げて来て建国した」国であるという。
○「倭人（卑弥氏）」の一部が「倭城」から逃げて大凌河を下る。（第１回目）

### (3) 天氏と卑弥氏の出会い

「倭人（天氏）」は「倭人（卑弥氏）」に国を譲る。

其最顕者為安冕辰沄氏。本出東表牟須氏、與殷為姻。譲国於賁彌辰沄氏。賁彌氏立未日、漢寇方薄其先入朔巫達、撃退之。　『契丹古伝』

（訳）その最も顕著なる者が安冕辰沄氏である。本（もと）東表の牟須氏の出であり、殷と姻をなす。国を賁彌辰沄氏に譲る。賁彌氏が立って未だ日が経たないうちに漢が攻めてきて、方（まさ）に薄（せま）り、その先朔巫達に入る。これを撃退する。

「天氏」は大凌河下流域に居る。そこへ「倭城」から「卑弥氏」の一部が大凌河を下って来る。

□「倭人（天氏）」は国を「倭人（卑弥氏）」に譲る。

■「前200年」頃のことである。

## 2　「倭人（卑弥氏）」は朝鮮半島へ

### (1) 卑弥氏の朝貢

「松野連系図」に「宇閉」が居る。

宇閉
漢の宣帝の時（地節二年）、遣使。　　「松野連系図」

□「卑弥氏」の「宇閉」は「地節二年（紀元前68年）」に漢へ朝貢している。
- ■「前200年」に「天氏」から国を譲ってもらった「大凌河下流域」からの朝貢であろう。
- ■しかしそこは「前75年」に「遼東郡」になる。
- ■「遼東郡」から夷蕃の「卑弥氏」が朝貢していることになる。

さらに「前50年」頃に「漢」は東北地方の支配を強化する。
○「卑弥氏」はそれを嫌い、国を捨てて朝鮮半島南部へ逃げる。

### (2) 漢と「卑弥氏」

漢と卑弥氏の関係は次のようになる。

○漢と卑弥氏の関係（まとめ）
- ■「前108年」、漢は「衛氏朝鮮」を討ち、四郡を設置する。
- ■「卑弥氏」の国は「真番郡」に属する。
- ■「前75年」に漢は遼東郡の領域を拡大する。「卑弥氏」の国は「遼東郡」に入る。
- ■「前68年」、卑弥氏の「宇閉」は漢へ朝貢する（大凌河下流域の国から）。
- ■「前50年」ころ、漢は「遼東郡」の支配を強化する。
- ■「卑弥氏」は漢の支配を嫌い、国を捨てて朝鮮半島へ逃げる。

## 3　朝鮮半島の「倭国」

### (1)「倭国」の建国

「前50年」ころ「卑弥氏」は「大凌河下流域」から逃げて来て、朝鮮半島南部に「倭国」を建国する。

韓在帯方之南。東西以海為限。南與倭接。方可四千里。　　『三国志』韓伝
（訳）韓は帯方郡の南に在り、東西は海を以て限りと為す。南は倭と接す。方四千里ばかり。

○韓国の南に「倭（国）」がある。
- ■「前50年」ころ「卑弥氏」の「倭国」は朝鮮半島南部に建国される。

■「倭国」は韓国の南にある。

**(2)「朝鮮半島の倭」と「弁辰国」**

『三国志』「弁辰伝」に「倭国」が出てくる。

■男女近倭、亦文身。
（訳）（弁辰国の）男女は倭に近いところでは亦文身（入れ墨）する。
■其浣盧国與倭接界。
（訳）其の浣盧国は倭と界を接す。　『三国志』弁辰伝

□「倭国」は「弁辰国」の隣にある。

『三国志』「弁辰伝」に「倭国」と「弁辰国の鉄」が出てくる。

国出鉄。韓濊倭皆従取之。諸市買皆用鉄。如中国用銭。又以供給二郡。
『三国志』弁辰伝
（訳）（弁辰）国は鉄を出す。韓と濊と倭は皆従い之を取る。諸市では皆鉄を用いて買う。中国で銭を用いる如し。又以て二郡（楽浪郡と帯方郡）に供給する。

「韓と濊と倭」は弁辰国の鉄を取りに行くとある。「韓と濊」は朝鮮半島内の国である。「倭」も朝鮮半島南部にある「倭国」であろう。
「朝鮮半島南部の倭国」が「弁辰国」の「鉄」を取りに行っている。
ところが従来は、歴史学者も考古学者も「日本列島の倭が弁辰国の鉄を取りに行く」と解釈している。それは誤りである。

□「後漢時代」の「倭国」は「朝鮮半島南部」にある。「日本列島」に存在したのではない。

## 4　弥生時代後期と倭奴国の樹立

**(1)「弥生時代後期」の始まり　（紀元元年（０年）ころ）**

「弥生時代の年表」によると「弥生時代中期」以降の年代は次のようになっている。

○「弥生時代の年表」
■弥生時代中期末……紀元元年（０年）ころ
■弥生時代後期初頭～後期前半……０年～50年ころ
■弥生時代後期後半～終末……50年ころ～200年ころ

### (2)「弥生時代後期」の「須玖遺跡」

「弥生時代中期」の「春日丘陵」付近は「天孫降臨」した「天氏」の「神都（須玖岡本遺跡）」であった（前述）。

『須玖岡本遺跡』（吉川弘文館）によると「弥生時代後期」になると「中期」とは様相が異なるという。

（1）集落

■青銅器やガラス工房跡の存在が注目される春日丘陵北方の低地には、弥生時代後期の遺跡が広く分布する。

■大南遺跡……須玖岡本遺跡の南方約1.2kmの位置にある。周縁部に断面V字形の溝が巡るいわゆる環濠遺跡である。（中略）九割以上は平面形が方形や長方形を呈した後期の住居跡が占めていた。（中略）環濠が掘られたのは中期末前後の時期と推定される。

■大谷遺跡……須玖岡本遺跡の南端に位置する。中期の住居跡が大半を占めていた。（中略）中期末あたりで集落がいったん途絶えたように見受けられる。

■駿河遺跡……春日丘陵の東方の低平な台地。後期の竪穴住居跡は平面形が長方形を呈するものが多く、いずれもベット状遺跡が付設されている。（中略）掘立柱建物跡は（中略）弥生時代後期に位置づけられる。

『須玖岡本遺跡』（吉川弘文館）

（2）墳墓

■中期前葉以降になると春日丘陵とその周辺には、集落の急増にともない突如として墓地が各所に形成された。（中略）弥生時代中期に盛行した甕棺墓も、後期になるとまもなく激減する。

■宮の下遺跡……春日丘陵の西部、須玖岡本遺跡の南方1.3km。甕棺墓の一部は土壙墓、石棺・石蓋土壙墓と重複し、なかには甕棺墓自体が破壊されたものもある。　『須玖岡本遺跡』（吉川弘文館）

□「天氏」の都の滅亡

■「弥生時代後期」に天氏の都（須玖遺跡）は破壊されている。

■「王権」が交代している証拠であろう。

■「紀元０年」ころから「弥生時代後期」が始まる。

■「紀元０年」ころに大量の渡来人が博多湾沿岸に来ている。

■新しい渡来人により「弥生時代後期」が始まる。

### (3)「倭国」と「倭奴国」

「57年」に「倭奴国」は後漢の光武帝より金印を賜る。

建武中元二年、倭奴国奉貢朝賀。使人自称大夫。倭国之極南界也。光武賜以印綬。　『後漢書』倭伝

（訳）建武中元二年（57年）、倭奴国は奉貢朝賀す。使人は自ら大夫を称す。倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以てす。

このときの「金印」が博多湾の「志賀島」から出土している。
後漢王朝から金印を賜ったのは「倭奴国」である。
図24　倭国と倭奴国

□「57年」ころ博多湾沿岸に「倭奴国」があり、後漢王朝から金印を賜る。

### (4) 卑弥氏の「倭奴国」

「松野連系図（卑弥氏）」に「中元二年に漢へ和通し、印綬を賜る。倭奴国王を称す」とある（65号）。

「松野連系図」により、「倭奴国」は「卑弥氏」であることがわかる。また「倭」を称するのは「卑弥氏」である。「倭奴国」という「倭」が付いていることから見ても「倭奴国」は「卑弥氏」の国である。

「前50年」ころ、「卑弥氏」は大凌河下流域から朝鮮半島南部に逃げてきて「倭国」を建国する（前述）。

その中の一部が「紀元０年」ころ博多湾に上陸して「倭奴国」を建国したのであろう。「天氏」の都を破壊している。

その証拠に「須玖遺跡群」の一角を占める「弥生時代後期（１～２世紀）」の「竹ヶ本Ｂ遺跡」から朝鮮半島東南部の墓に見られる「錨形鉄器」が出土している。（2019年２月26日、朝日新聞）

## 5　「倭奴国」と金印

### (1) 金印の出土地

金印は志賀島の辺鄙なところから出土している。しかも小さな石囲いの中に埋めてあった。見つからないように埋めたのであろう。

金印をもらった「倭奴国」に重大な事件が起こり、金印を隠したのであろう。

### (2) 金印の真贋論争

最近、また「金印」の真贋論争が起きている。

しかし、「金印」は本物である。

「金印」は誰にも見付けられないように隠して埋めている。

「偽物」を作るならば後世に必ず見付けてもらえるような場所に埋めるはずである。見付けてもらえなければ「偽物」を作る意味がない。

「金印」が見付けられないような場所に埋めてあったことは「金印」が「本物」で

ある証拠である。

### (3) 倭奴国の滅亡と金印

「金印」は取られないような場所に埋めてある。「金印」を賜った「倭奴国」が亡びたので「金印」を取られないように辺鄙なところに埋めたのであろう。

「弥生時代の年表」では「弥生時代後期前半」は「０年～50年頃」である。「50年頃」は「57年頃」ではないだろうか。

「57年」に金印を賜った直後に「倭奴国」は亡びたのであろう。そのとき「金印」を取られないように志賀島に隠した。

これが真相であろう。

## 6　不彌国

### (1) 不彌国の戸数

『三国志』「倭人伝」に「不彌国」の戸数がある。

○「女王国より以北」の国々の「里数」と「戸数」

| 国名 | 里数 | 戸数 |
|---|---|---|
| ・対海国 | 千餘里 | 千餘戸 |
| ・一大国 | 千餘里 | 三千許家 |
| ・末盧国 | 千餘里 | 四千餘戸 |
| ・伊都国 | 五百里 | 千餘戸 |
| ・　奴国 | 百里 | 二萬餘戸 |
| ・不彌国 | 百里 | 千餘家 |

○「一大国」と「不彌国」は戸数が「家」になっている。

### (2) 朝鮮半島南部の「戸数」

朝鮮半島南部では「戸数」はすべて「家」である。

■凡五十餘国。大国萬餘家、小国数千家。　『三国志』韓伝
■弁辰韓合二十四国。大国四五千家、小国六七百家。　『三国志』弁辰伝

### (3)『三国志』韓伝の「不彌国」

『三国志』韓伝に「不彌国」がある。

博多湾沿岸の「不彌国」は朝鮮半島南部の「不彌国」から一部の人々が渡来して建国したのであろう。

□「不彌国」は朝鮮半島南部の「不彌国」の分国であろう。
■戸数は「家」になっている。「不彌国」は「倭人（卑弥氏）」の国ではない。

**(4)「不彌国」の成立時期**

「弥生時代後期後半～終末」は「50年ころ～200年ころ」である。

「57年」の直後頃に「倭奴国」は亡びる。おそらく「不彌国」が「倭奴国」を滅ぼしたのであろう。

「57年」に「倭奴国」が金印を賜った直後頃に朝鮮半島の「不彌国」の一部が博多湾沿岸に渡来して「倭奴国」を追い出したのであろう。

○「倭奴国」は「筑紫野市隈」へ逃げる。

## 7　伊都国王権

**(1) 伊都国は不彌国を支配**

博多湾に渡来して「倭奴国」を追い出した「不彌国」を「伊都国」が支配する。その時期は不明である。

「考古学」でも「弥生時代後期後半～終末」は「50年ころ～200年ころ」としている。「57年」頃に「不彌国」が「倭奴国」を追い出してから「200年」ころまでは文化的な変化は無かったようである。

○「不彌国」が朝鮮半島南部からもたらした文化は北部九州に影響を与えていない。
　■「不彌国」が博多湾沿岸を支配していたのは短期間だったのであろう。

**(2) 伊都国王権の確立**

伊都国は支配する国々に副官「卑奴母離（ひなもり）」を派遣する。

「対海国・一大国・（末盧国）・奴国・不彌国」の副官は「卑奴母離」である。「伊都国王権」が支配下の国々を監視するために派遣している。

図25　伊都国王権

□伊都国王権
　■「伊都国」にだけ「王」が居る。
　■他の国には「卑奴母離」が居る。伊都国には居ない。
　■「卑奴母離」は他の国の「副官」である。
　■「卑奴母離」は他の国々を監視するために「伊都国」が派遣した官であろう。
　■「弥生時代後期後半（57年以降～200年）」は「伊都国王権」の時代である。
　■伊都国王権は「対海国（対馬）」、「一大国（壱岐）」を支配している。
　■伊都国は朝鮮半島や中国と交流していることがわかる。
　■その証拠に、伊都国の王墓から後漢時代の鏡等が多数出土している。

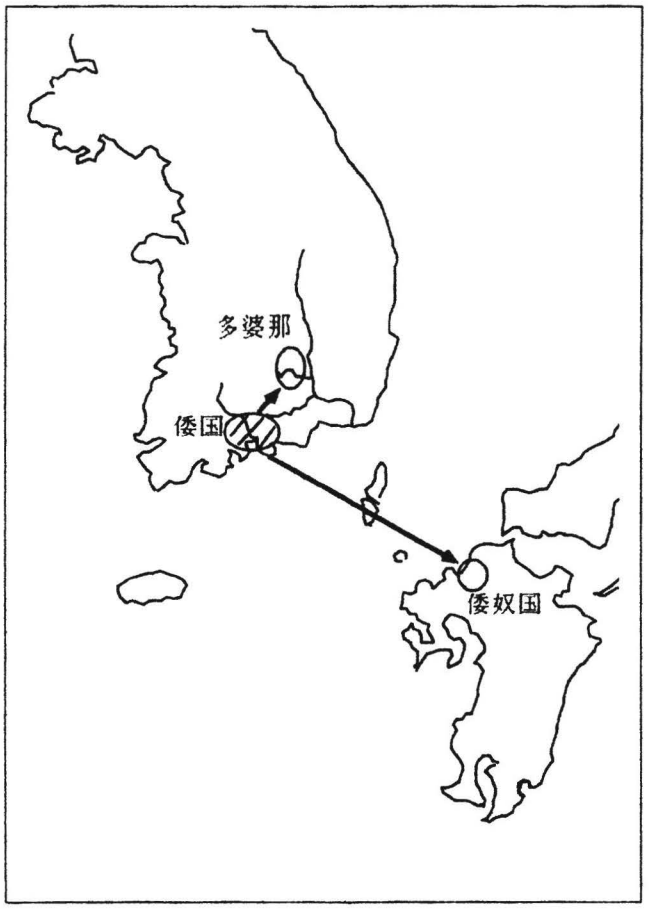


図24　倭国と倭奴国

○伊都国王権

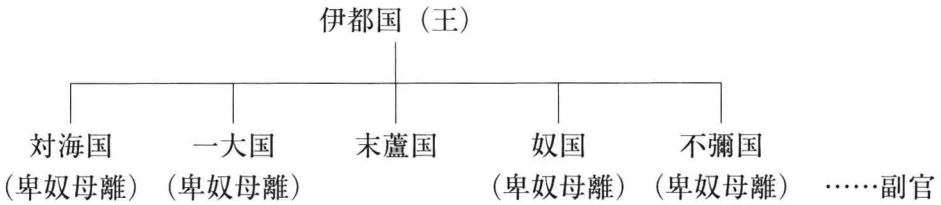


図25　伊都国王権

# 第14章　「後漢時代」の倭（佃説）

## 1　公孫氏と「倭」

### (1) 公孫康と帯方郡

「204年」に公孫度は死去する。

（公孫）度死。子（公孫）康嗣位。（中略）是歳建安九年也。

『三国志』公孫度伝

（訳）（公孫）度死す。子の（公孫）康が位を嗣ぐ。（中略）是歳は建安九年（204年）なり。

「204年」に「公孫康」は父公孫度の位を嗣ぐ。

「桓帝（147年～167年）」「霊帝（167年～188年）」の時代に朝鮮半島では「韓（国）」と「濊（わい）（国）」が暴れ回る。

桓霊之末、韓濊彊盛、郡縣不能制。民多流入韓国。建安中、公孫康分屯有縣以南荒地為帯方郡。遣公孫模・張敞等、収集遺民、興兵伐韓濊。是後倭韓遂属帯方。

『三国志』韓伝

（訳）桓帝と霊帝の末に韓と濊は彊く盛んになり、楽浪郡やその縣は制することができなかった。民は多く韓国に流入する。建安中になると、公孫康は屯有縣を分けて南の荒地を以て帯方郡と為す。公孫模・張敞等を遣わし、遺民を収集して、兵を興し韓と濊を伐つ。是の後、倭と韓は遂いに帯方（郡）に属す。

□公孫康は「建安中（196年～219年）」に「帯方郡」を設置する。

- ■公孫康は朝鮮半島内を荒らし回る韓と濊を伐つ。
- ■すると「倭」と「韓」が帯方郡に属したという。
- ■「204年」に父公孫度の後を継ぐ。「帯方郡」の設置は「204年～219年」の間である。

□「204年」以降まで「倭（国）」は「朝鮮半島南部」にある。

- ■「後漢時代（25年～220年）」の「倭国」は「朝鮮半島南部」に在った。「日本列島」にあったのではない。

○ところが「日本の歴史学者」や「考古学者」は「後漢時代の倭（国）」は日本列島にあったとしている。

### (2)「倭国王帥升」の朝貢

「107年」に「倭国王帥升等」は後漢王朝へ朝貢する。

安帝永初元年、倭国王帥升等献生口百六十人、願請見。　　『後漢書』倭伝
（訳）安帝の永初元年（107年）、倭国王帥升等は生口百六十人を献じて、請見を願う。

「倭国」は「前50年～204年」以降まで朝鮮半島南部にある。

□「107年」に後漢王朝に朝貢した「倭国王帥升」は朝鮮半島南部の「倭国」の王である。
- ■「倭国」は「卑弥氏」の国である。
- ■「倭国王帥升」は「倭人（卑弥氏）」である。

□「204年」以降に公孫康は「韓（および倭）」と「濊」を伐つ。
- ■朝鮮半島から大量の人々が日本列島に逃げてくる。
- ■日本列島は「弥生時代」が終わり、「古墳時代」に入る。
- ■朝鮮半島南部から逃げてきた人々の一部は大和に「纒向王権」を樹立する（76号）。